

2024. 8. 1 三校園夏季教育実践研究会～育ちのつながりを感じ考え、それぞれの場での実践を考えていく～

7月の下旬に、福井大附属の幼稚園・義務教育学校・特別支援学校の三校園の先生方が、報告者と聴き手で数人のグループとなって実践を聴き合う実践研究会が行われました。毎年、夏と春に行われています。三校園の先生方混合の各グループに、福井大学教職大学院の先生方がファシリテーターで入ってくださいます。義務教育学校の研究の先生方が、考えてグループ作成をしてくださり、昨年度、初参加だった私は、異校種だけでなく大学院の先生まで入ってくださって実践を聴き合える時間に、とても感動しました。もちろん、実践報告をする先生方は、ある程度の長い期間の実践をまとめる大変さや、当日語ることへの緊張感があり、幼稚園の先生方からも、前日までのドキドキ感と、終わった日のほっとした気持ちを感じられました。

今年度、私が参加させていただいたグループの実践報告の一つは、1年生の造形の実践でした。その実践は、6月の幼稚園・義務教育学校の教育研究集会で授業が公開されていて、6月は幼稚園も公開保育をしていたため見に行くことができなかったのも、実践報告が聞けることがとても楽しみでした。

実践報告の資料の最初の「1 学びの構想」のところには、「入学してから1週間ほど、幼小接続の環境としてスタートカリキュラムの中で子供たちは過ごした。登校した子供たちは、朝の準備を終えた後、1時間から1時間半ほど『ふれあいタイム』で好きな遊びをして過ごし、その後、『話そうタイム』で活動したことをみんなと共有していた。その中で、子供たちは校庭で虫を探したり、紙類や紐類を中心とした工作をしたりして遊んでいる姿が見られた。さまざまな活動が見られる中で、多くの子供たちが夢中になったものは学校探検であった。前期課程側、後期課程側問わず、子供たちは気になるところでどんどん足を運んで行った。教室に戻ってくると『話そうタイム』、理科室で見つけた骸骨や人体模型の話をし、夜には動くのだと怪談話になった。学校探検を繰り返し、子供たちの行動範囲が広がっていく中で、子供たちは暗い部屋や人気の少ない場所を見つけ、それらの場所を「お化け屋敷」と表現するようになった。今回の題材設定は、この子供たちの学校探検から見つけた「お化け屋敷」が発端である。子供たちは、そこに遊びのルールを作り、「10秒で通らないと幽霊が出てくるよ」と楽しんだり、そこに置かれているもので遊んだりして、秘密の隠れ家のような場所にいることを好んでいた。このような子供たちが好きになった場所、遊びのイメージが広がる場所に色や形でつくりだして実現することで、みんなと共につくり出すヨロ込みを味わえると面白いのではないかと考えた。」と書かれていました。

スタートカリキュラム時期の子どもたちの様子、先生が子供たちの姿をもとに単元構想をされていた様子に、とてもわくわくしました。

ファシリテーターで入ってくださっていた大学院の先生が、実践をするのにあたり、幼稚園のことをイメージしていたのかどうかについて、報告者に訊かれた時がありました。そうしたところ、報告者の先生は、ご自身が教職大学院のカンファレンスで、附属幼稚園から数年前に教職大学院に行っていた先生が書いた実践を読んだことや、附属幼稚園の研究集会で講師の無藤隆先生の「出会って行って、世界を愛していく」という話をお聞きしたことがあることを話してくださいました。学びの構想をする時の教師がイメージしていることの大切さを改めて感じました。

また、この時、この実践研究会の数日前に行われた、第70回全附属幼稚園教育研究集会（オンライン）の正副園長の情報交換会で話をしたことを思い出しました。今年度は「小学校との接続」のテーマに参加

しました。グループで北から南まで5つの都道府県の同じグループの園の先生方から各園のお取組をお聞きしました。本園の取組からは、「6月に幼稚園・義務教育学校合同での教育研究集会をしていること」

「夏と春の年2回、福井大附属の幼稚園・義務教育学校・特別支援学校と教職大学院の先生方混合のグループで実践の語り合いが行われていること」「幼小接続の会議が年に数回行われ、1回目は、入学式・入園式前に幼稚園で行われ、今年度は前期課程の先生方が会議の後に園の環境を見て回られて、前期1年生の教室に環境を準備してくださったこと」「4月2週目頃に、昨年度の年長児担任が1年生のふれあいタイムの時間を見学して、子どもの様子を見取って1年担任に伝えていること」「12年間の育ちのつながりの核として『探究』が考えられていること」などをお伝えしました。他県の先生方から、「本園の園長が、幼稚園と義務教育学校（前期・後期）の12年間の校園長としておられること」が幼小のつながりをしっかりとしたものになっているというご意見もいただき、その通りだと思いました。本園と義務教育学校との間で、もちろん子供同士の交流の機会も「年長と1年生」「年長と5年生」「幼稚園全体と9年生（家庭科）」等があります。しかし、こういった子供同士の交流だけでなく、先生方が研究集会や実践研で、ある程度の長期のスパンの互いの実践を知り合い、育ちのつながりを感じ考え、それぞれの場での実践を考えていくためにとても大事な時間となっていると思いました。

